

“おもしろくて ためになる 学びの共有”  
わかちあい

秋田県教育カウンセラー協会機関誌

# 教育カウンセラー あきた

第8号

2005年（平成17年）7月9日発行

## 望ましいしつけを

秋田県教育カウンセラー協会

代表 水戸谷貞夫

新聞の社会面やテレビの報道番組では痛ましい事件が溢れていると感じさせられる。何が、どうして、何故にこんな世の中になったかについて識者が様々な指摘をしているが、共感できることとしては、幼児から大人になるまでのしつけの不十分さがある。子どもの目線で見ようとか、子どもをもっと大事にとか言われる方の子弟は必ずしも立派でないことも存じ上げている。

望ましいしつけの基本は、子どもが嫌がってもやらせなければならないことは、必ずやらせることである。そのことを忘れていた両親や周りの人々は、最も大切なことをないがしろにしていることに一日も早く気づいてほしいと願っている。新幹線や飛行機の中で、親子共々怒鳴りつけたい思いをしている高齢者も少なくないことを忘れないでほしい。

望ましいしつけは、中学生時代まで確かに

身についてほしいものである。それができない場合は社会人として失格であるとさえ指摘されるのが普通である。望ましいしつけの項目としては、①身体や衣服は清潔か、②洗面や歯磨きは、③交通やその他の安全は、④物やお金の使い方は、⑤自分と他人の物の区別は、⑥時間の使い方は、⑦身の回りの整理整頓は、⑧規則の守り方は、⑨あいさつの仕方は、⑩身だしなみは、などがある。言葉づかいを含めてこれらについては、発達段階に応じて確かに身につくところまで指導してほしいものである。ニートと言われる若者が育った原因として、しつけのことが挙げられていたが、私も同感である。青少年の発達課題として自立が挙げられていたが、その基本となるのが望ましいしつけであると考えているこの頃である。



## 「3年目の活動に向けて」

秋田県教育カウンセラー協会

理事 浅沼 知一

秋田県教育カウンセラー協会も、3年目を迎えた。俗に「3年目の中だるみ」とも言われるが、たしかに創立当初と比較すると、協会の発する『熱』は、多少下がっているかもしれない。

しかし、代表をはじめとする協会リーダー達の士気は変わらず、むしろモチベーションは高まっているとさえ感じられる。

単に私一人の思いに過ぎないかも知れないが、この「多少下がっている」と「むしろ高まっている」という、矛盾するかのような感慨は、何を意味しているのだろうか？

例えば、『熱』=エネルギーが、協会の内部に向かっている...との考え。換言すれば、これまで地域に教育カウンセラー（協会）の存在をアピールし、「外部に発する」にウエイトを置いていたのが、創立期を過ぎた今、協会の運営や活動を見直し、足元を固めようとする「内部の充実」に向かい始めた...ということ。これなら、発する熱は少ないが、核は熱い...という状態を矛盾無く説明できる。

将来、教育カウンセラーの活躍の場は拡大し、仲間も増えていこう。その時に備え協会の基盤を確かにすることが必要となる。

3年目の今年を、その出発点としよう！



## 「ますますおもしろくて

## ためになる学びの場」

秋田県教育カウンセラー協会

理事 佐藤さゆり

本協会も発足3年目を迎えました。この間、養成講座を始め数多くの学びの場がありましたが、そのたびに多くの方と共に学びましたことに心より感謝致します。

この間、継続して勉強されている方がどんどん力をつけ、活躍される姿を目にしています。このような仲間に出会えていることを嬉しく思います。「継続は力なり」ということを実感する3年でした。

さて、以前盛岡で行われた講演の中で國分康孝先生は、「みなさんには勉強をする義務がある」と激励して下さいました。勉強しておけばこそ、大事な場面で学びを活かして子どもにきちんと関わることができるということでした。「学び」をしっかりと積み重ねていくことの大切さを考えさせる言葉だと思います。またこの言葉は教育カウンセラーとしての在り方を示す言葉でもあるように感じています。

この7月には宿泊を伴った「構成的グループ・エンカウンター体験ワークショップ」が初めて開催されます。県外からも多くの方が参加される、すてきな学びの機会です。今後も本協会は、「おもしろくてためになる」学びの場をみなさんと共有していきます。多くの方との出会いを楽しみにしております。

## 新刊紹介

# 「教師の コミュニケーション事典」

私たちの言葉かけ如何によって生徒の思考・感情・行動に大きく影響を与えることは、日々の学校生活で、多くの先生たちが感じていることだと思います。本来私たちが目指している教育的なコミュニケーションは、効果的な励ましや声かけによって、その子どもたちの成長や大きな力を発揮することをねらいとして行われていますが、必ずしもそのねらい通りにいかないことがあります。時には、誤解を生んだり、知らないうちに相手を傷つけていることさえあります。そんなときの私は、「あのときは、あの子にはどんな言葉かけが一番よかったのだろう？」と反省し、同僚の先生に相談しながら、自分のコミュニケーションの引き出しを増やそうとします。みんなそれぞれ、自分の経験から身に着けたことを交換し合うことで、いろんな場面を乗り

切っているのが現状ですが、最近の現場の多忙さは、そんな同僚とのコミュニケーションの時間までも奪っているような状態です。また、子どもたちの多様化に伴い、それぞれに合わせた多様な言葉かけが必要にもなっています。

今回図書文化社から出版された「教師のコミュニケーション事典」は、私たち教員が遭遇する様々な場面の効果的なコミュニケーション例を1冊にまとめたものです。子どもたちに対するものだけでなく、保護者や職場、外部機関との対応も含まれた、500テーマを超える豊富な場面例で構成されています。1テーマは1ページで完結されているので、時間のあるときに斜め読みしながら、自分の引き出しを増やすことにも使えます。効果的な指導を目指すため、また、子どもをはじめとする多くの人たちとの日々の信頼関係を築くため、身に着けておきたいコミュニケーションがこの1冊に詰まっているので、学校には置いておきたい本の一つだと感じます。

〈秋田県教育カウンセラー協会運営委員 淡路亜津子〉

## 編・集・後・記

佐藤さゆ里さんの記事の中に國分康孝先生のご講演の言葉が引用されていたので「はっ」とした。私も岩手の会場にいた一人であるが、私にはこんな言葉が心に残っている。「悩みがあるのは勉強不足だからだ。」まるでハンマーで頭を殴られたようだった。「勉強しなくては！！」とそのときはそう思う。でも、しばらくすると情けないことにまた元の自堕落な自分に戻ってしまう。こんな私でもさまざまな講義等を聞いたり、実践することでいくらかはきっと前進(?)している。勉強の機会はなるべくはずさないようにしよう。さもないと全く前進しないことになりそうだ。また、協会としても2年目を乗り越えたということの意味をよく考えていきたい。継続することは、やはり難しいことだからである。(Y)